



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オーストラリアの北部開発論における開発目的と計画地域
Author(s)	谷内, 達
Citation	北海道大学人文科学論集, 14, 143-158
Issue Date	1977-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34327
Type	departmental bulletin paper
File Information	14_PL143-158.pdf



オーストラリアの北部開発論における開発目的と計画地域

谷 内 達

(文学部助教授, 人文地理学)

I. 北部開発論

北部開発論とは、オーストラリアの「北部」を国家的政策として積極的に開発すべきであると言う主張である。「北部」とは、オーストラリア大陸における南回帰線（南緯 23 度 30 分）以北の地域を意味する（図 1）。ただし、連邦政府の国土開発省北部開発庁（1963～72 年）および北部開発省（1972～75 年）の行政においては、南緯 26 度以北が対象である（Australia, 1975）。南緯 26 度は、ノーザンテリトリーと南オーストラリア州との境界に一致する。いずれにしても、北部は行政区分ではなく、西オーストラリア・クイーンズランド両州の北部とノーザンテリトリーとを包含している。したがって本稿では、北部を計画地域として扱う。

北部開発論は、一つにまとまったものではない。さまざまな動機・目的を持つ主張の総称である。その内容は次のように要約できる。

「(1)人口増加に対応して生活水準を向上させるためには、オーストラリアの国家的資源を十分に開発する必要がある。現在、北部の資源は十分には利用されていない。

(2)広大な『空白地域』を未開発のままにしていると、人口過剰諸国との関係から国際問題が生じるので、これを避ける必要がある。さらに、北部を開発しておいた方が、戦時には防衛が容易である。

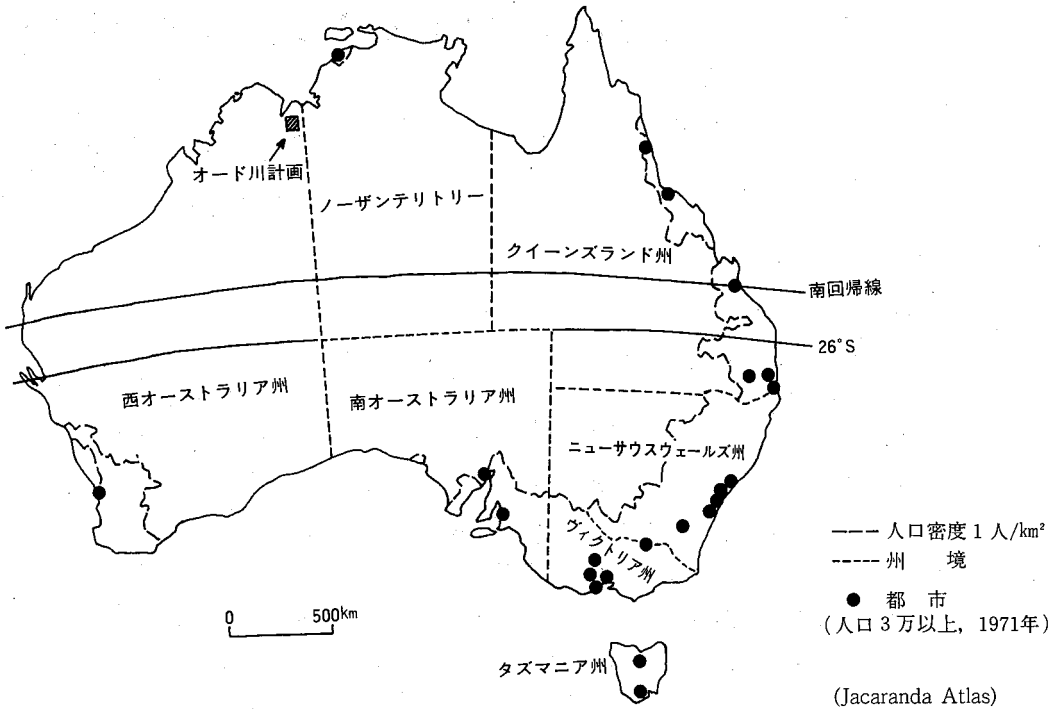
(3)気候条件を生かして、熱帯・亜熱帯作物（特に綿花）を生産し、輸入代替を計るべきである。

(4)オーストラリアは、人口過剰なアジア・アフリカ諸国の飢えた人々に、食糧を供給すべきである。

(5)高度に開発された南部に対する未開発の北部と言う不均衡を是正し、均衡の取れた地域開発を達成する必要がある。」(Barlow & Newton, 1971, p. 186.)

開発目的と計画地域の設定との間には、対応関係が存在するはずである。本稿では、北部を設定する指標として、(1)熱帯、(2)対アジア関係、(3)人口希薄および(4)周辺性を取り上げる。この内、熱帯と対アジア関係とは、直接の指標である。これに対して人口希薄と周辺性とは、北部の重要な属性であり、二次的な指標と考える。

図1 「北部」の範囲と人口密度



本稿では、各指標に即して、計画地域としての北部の設定と北部開発論との関連を検討する。

II. 熱帯としての北部

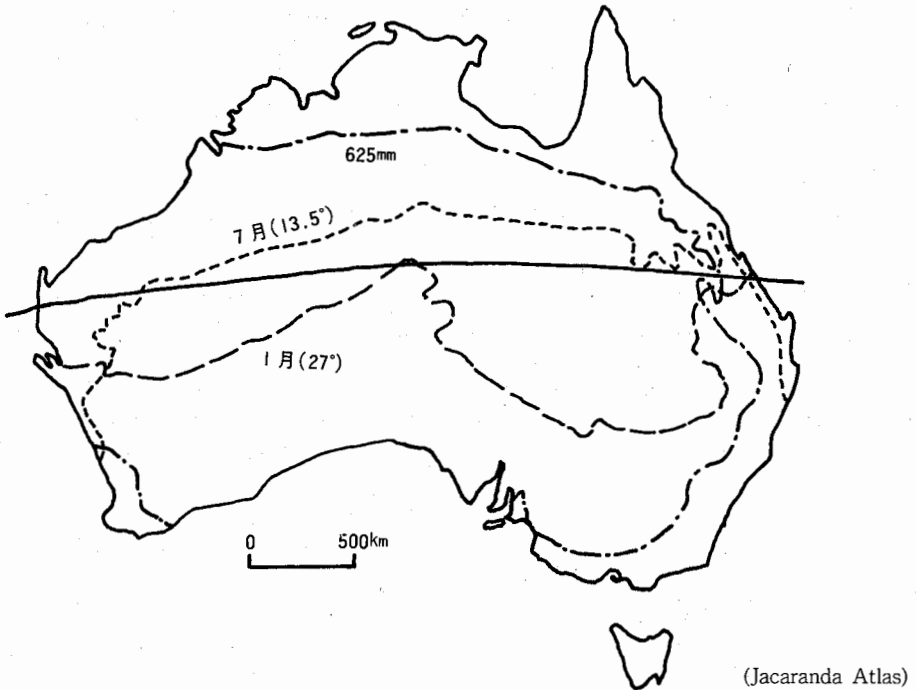
熱帯としての認識は、北部を設定する最も基本的、直接的な指標である。多くの場合、「北部オーストラリア」と「熱帯オーストラリア」とは同義語である。熱帯としての認識は、積極的なものと消極的なものとに分けることができる。

1. 熱帯の積極的認識

これは、北部における資源開発の潜在的可能性を楽観的に評価する。特に太陽エネルギーおよび水資源に立脚した熱帯農業開発論となる(図2)。

「オーストラリア大陸への移住者は、ヨーロッパ北西部、特にイギリス出身者であった。この事実が、大陸の北部熱帯地域に対する一般的な態度に、強く影響したと思われる。熱帯に関するイギリス人の典型的な認識は、直接、間接に、西インド諸島、インド、東南アジアおよびアフリカにおける、商人、役人および伝道者としての経験に基いている。〔中略〕北部に対する公的、私的態度は、進出の当初から少なくとも第二次大戦まで、この線に沿うものであった。」

図2 気温と降水量



(Courtenay, 1975a, p.1.)

北部での熱帯農業の事例としては、クイーンズランド州海岸部の砂糖産業と、西オーストラリア州北部のオード川計画とがある。

クイーンズランド州の砂糖産業は、19世紀以来の歴史を持ち、北部における熱帯農業のほとんど唯一の「成功例」とされている。しかし、この砂糖産業は、北部開発論の形成に対して、やや先行して発展したものである。したがって、本稿で意味する北部開発としての明確な意図のもとに成立したものとは言い切れない。

これに対して、オード川計画は、北部開発として戦後着手され、北部開発論争の直接の対象となった。本稿では、北部開発一般に関する論争と共に、この計画にも触れる。

オード川計画とは、西オーストラリア州北部のキンバリー地方を流れるオード川の水資源に基づく灌漑農業計画である。計画は、(1)分水ダム建設と1万2000ヘクタールの灌漑、(2)主ダム建設と合計6万ヘクタールの灌漑、および(3)水力発電の三段階に分かれている。連邦政府の資金援助で1959年に着工し、1963年に分水ダム、1972年に主ダムが完成した(Kerr, 1967, pp. 166 & 191; Cannegieter, 1964, pp. 375-376; *The Australian*, 19 April 1976)。この第二段階の主ダム建設に対する連邦政府の資金援助が検討されていた1960年代半ばに、この計画の是非をめぐる

活発な論争があった。一つは、オード川計画を含む北部開発全般に対する Davidson (1965) の批判であり、もう一つは、オーストラリアの代表的な経済学学術誌である *Economic Record* 誌における一連の論争 (Cannegieter, 1964, 1965a & 1965b; Bowen, 1964, 1965a & 1965b; Laing, 1964; Campbell, 1964 & 1965; Musgrave & Lewis, 1965a & 1965b) である。

このように、オード川計画は、熱帯農業開発計画として、北部開発の性格を持っている。オード川計画への連邦政府支出を規定した法律の名称にも「北部開発」の表現が用いられている (Australia, 1959 & 1963)。西オーストラリア州政府も、「オード川計画は、オーストラリアの最後のフロンティアの一つを開拓するものである。この計画は、キンバリー地方だけでなく、北部オーストラリア全域のための開発方式を設定する」としている (Western Australia, 1968)。

オード川計画における熱帯の積極的認識は、特に水資源の評価に現れている。この計画の最大の動機は、オード川がオーストラリアの最大流量記録を持つ (Munro, 1974, p. 157) と言う事実であろう。この豊かな水資源と、下流の肥沃な土地とを結び付け、主として綿花を生産するのが計画の骨子である。計画支持者は、単位貯水量・単位灌漑面積当たりの費用がきわめて小さいことを、特に強調する (Patterson, 1965, p.59)。

2. 熱帯の消極的認識

これは、熱帯の居住・開発環境が白人に適さないと言う認識である。したがって、19世紀後半には、アジア人労働力の導入を企てた例が少なくない。また当時のクイーンズランドでの綿花・砂糖きび栽培は、太平洋諸島人の労働力に依存していた (Courtenay, 1975a, pp. 1-2; Learmonth, 1971, pp. 196-197; Davidson, 1965, p. 70)。

1901年の連邦結成に伴い、いわゆる白豪政策が成立した。太平洋諸島人労働者の奴隷的酷使に対する批判が直接の原因であった。この結果、熱帯での農業開発は、すべて白人が行うことになった。

「連邦結成後、クイーンズランド州の砂糖産業は、白人労働者の使用による生産費の増加に見合う保護が保証された。こうして、クイーンズランド北部における、いわゆる『熱帯での勝利 (Triumph in the Tropics)』のパターンが成立した。小規模自営農場と移動刈取労働者による方式への転換は、北部開発と言う政治的願望の一部として奨励された。」(Learmonth, 1971, p. 197.)

北部開発に非白人労働者を導入する議論は、現在でも皆無とは言えないが (Wilkes, 1956, p. xv), これは、北部開発の重要な動機の一つである対アジア警戒論と矛盾する。したがって一般的には、白人による開発が前提であるとすべきである。こうして、「1930年代までには、北部は、熱帯と言う環境により国家への完全な統合がきわめて困難な問題地域として成立して」 (Courtenay, 1975a, p. 2) いた。たとえば「白人のクイーンズランド北部は、オーストラリア連邦全体の責任である」 (Bolton, 1970, p. 339) として、白人による開発の前提によりますます

開発が困難となる熱帯に対して、連邦による援助を主張するようになった。

3. 批判

熱帯農業開発論は、資源に対する技術的評価のみが先行し、経済的考慮が不十分であるとして批判されている。

(1)「政治家は、新聞の支持を得て、オーストラリア人が抱いている北部開発の奇妙な幻想を利用した。すなわち、北部における作物・家畜の可能性を単に科学者が示したと言うだけの理由による、北部開発への期待である。しかし、政治家も科学者も、開発の費用は検討しなかった。どの地域でも、費用さえ掛ければ、いかなる作物も栽培できる。」(Davidson, 1972, p. xvi.)
「土地と水とは、需要が存在する商品の生産に用いる場合にのみ価値がある。何を生産するにも、労働力や資本など、他の資源と結合させなければならない。」(Davidson, 1965, p. 9.)

(2)「西オーストラリア州北辺のオード川流域開発計画では、最初に相談を受けたのは技術専門家であった。次に地質学者、農業問題専門家が意見を求められた。マーケットリサーチと経済問題の専門家が相談を受けたのは、最後であった。その頃には、計画そのものが引っこみがつかないところまで進んでいた。経済性を無視したこのような開発計画は、過去の入植政策のありがたくもない遺産である。」(Horne, 1970, 訳書 p. 40.)

III. アジアに面した北部

北部がアジアに面していて距離も近いとの認識からは、「対アジア警戒論」および「対アジア食糧供給論」が導き出される。

1. 対アジア警戒論

これは次の二点から成る。(1)この広大な北部を未開発のまま放置しておく、アジア人の侵略を招く。領有権を確実にするには、オーストラリア人による開発・居住の実績を作る必要がある。(2)国土防衛のためには北部を人口稠密にする必要がある。

「オーストラリア人にとっては、北部の人口がかくも少なく、資源が未開発なことは、道義的に誤りのようである。つまり何かしないと『大陸』全体を領有する主張の裏付けにならない、すなわち北部の放置がアジアの敵意を招く、と言う心配である。」(Horne, 1964, p. 137.)

このような考えは、既に戦前から存在していたが(Stuart, 1923)、第二次大戦の経験を経て、1950年代にますます強まった。

「もし開発しなければ、土地に飢えた人々が、国際機関に後押しされて、北部への移住を要求して来るのをどうして拒否できようか。〔中略〕人口こそが侵略に対する最善の保証である。」(Wilkes, 1956, p. 41.)

「すぐ北に隣接する土地にひしめく多産のアジア人が、耐え切れぬまでに羨望の度を増して

ゆくことは明らかである。」(Rees, 1953, p. 132.)

1960年代に入っても同様の認識が見られる(Court, 1965, p. 2)。北部開発構想は、いまだに防衛・占拠思想から脱却し切っていない(Chapman, 1975)。

オード川計画にも、これに通ずる発想が見受けられる。

「アジアの人口過剰諸国がオード川流域のような肥沃な土地を求めているときに、この流域に1万人が入植することは、国家として資源を放置せずに利用する意志のあることを示すことになる。」(Cannegieter, 1964, p. 384.)

さらに、オード川計画の「二次効果」の根拠にも用いられる。すなわち、クイーンズランドの砂糖産業の土地利用実績に基く侵略回避効果が、同産業への連邦補助金に相当すると考える。したがってオード川計画でも同程度の水準の政治的效果を期待するのである(Cannegieter, 1964, pp. 385-386; Bowen, 1964, pp. 392-393)。

この対アジア警戒論に対する批判を、Davidsonによる反論を中心に紹介しておこう。

(1)アジアには未開発の土地が多く残っている。アジアの食糧不足は、土地以外の障害による方が重要である。したがって土地の拡大・占拠以外の解決法が可能である(Davidson, 1965, pp. 4-5; Musgrave & Lewis, 1965a, p. 263)。

(2)歴史的に非常に古くから、アジア人はオーストラリア北部の土地を知っていたのに、入植の興味を示さなかった(Davidson, 1965, pp. 2-3; Musgrave & Lewis, 1965a, p. 263)。

(3)人口が集中し開発の進んだ南部を直接に侵略する方が、北部への侵略よりも有利である。したがって、開発された北部は未開発の北部よりも侵略の危険が大きい(Davidson, 1965, pp. 4 & 6; Barlow & Newton, 1971, p. 186)。人口は防衛には有効でなく、かえって負担を増す。また開発に伴う南北間の交通の発達には、南部への侵略を助ける(Davidson, 1965, p. 7)。

2. 対アジア食糧供給論

これも、人口過剰で土地・食糧の不足したアジアと、未開発のオーストラリア北部との対照に立脚している。これに、オーストラリアが西洋文明の一つとして生産力・技術が高水準と言う自負および使命感(Horne, 1964, pp. 103-104)、侵略の未然防止、対アジア援助、および市場としてのアジアの近さが加わる。

「オーストラリアは、西洋文明の代表として、南アジア・東アジアの大人口との、新しい生産的な関係を樹立すべきである。」(Copland, 1967, p. 1.)

これに対しても、Davidsonが反論している。

(1)北部で生産しようとしている作物は、すべてアジアでの生産が可能である。むしろアジアの重要な輸出品にさえなっている。したがって、北部での生産により、アジアとオーストラリア北部とは互いに競争相手となってしまう(Davidson, 1972, pp. 13, 18 & 272-273; Barlow & Newton, 1971, p. 186)。

(2)アジアでは生産水準が向上しつつあるし、北部よりも潜在的可能性が大きい (Davidson, 1972, pp. 15-16 & 272)。

(3)北部がアジアに近くても、現実の輸送費は有利ではない (Davidson, 1965, p. 18)。

(4)アジアへ供給するには、多くの場合、北部よりも南部からの方が有利である (Davidson, 1965, p. 8)。

IV. 人口希薄地域としての北部

北部は、面積では大陸の約2分の1を占めるが、人口はわずか5%足らずで、『空白の北部 (Empty North)』とも呼ばれる。したがって、北部の人口密度は著しく低く、人口密度1人/km²未満の土地が99%を占めている。しかし、人口密度の低い地域は、北部に限らない。南部にも広く存在しており、南部の83%が人口密度1人/km²未満である (Australia, 1973; Harris, 1975 により算出)。すなわち、人口希薄であることは、北部の重要かつ基本的な特徴であるが、人口希薄のみをもって北部を設定することはできない (図1)。

1. 開拓・入植論

人口希薄地域としての認識からは、オーストラリアの歴史的開拓・入植過程の延長としての開拓・入植論が生ずる。これは、経済性重視の視点を超越したものである。いわば「歴史的大事業」(Copland, 1967, p. 2)としての、絶対的な古典的入植論として把握される (Webb, 1969, pp. 2 & 8, & 1975)。

「オーストラリアのように、広大な地域にわたる不毛な乾燥地帯を抱えた国では、開発を進めるにあたって、経済性よりも想像力が必要とされた面があったことは理解できる。〔中略〕60年代の初期には、たとえ開発のための開発にすぎなくとも、とにかく“北部”の開発を進めるべきであるとの思想が一般的であった。」(Horne, 1970, 訳書p. 40.)

「この地域の生産能力を完全に開発するためにあらゆる努力をすることは、最大の義務であり、まさに必須のことである。」(Wilkes, 1956, p. 129.)

オード川計画においても、入植・人口増加への寄与が期待されている。

「オード川計画の主目的は、東キンバリー地区の集約的農業の開発によって、稠密入植を促進することにある。」(Kerr, 1967, p. 166.)

「オーストラリアの発展における開拓者の側面も、政治的要素として無視できない。オーストラリアの民主主義の成立基盤は、家族経営農場である。灌漑農業地域の開発は、開拓精神を持つオーストラリア人に自己表現の場を提供する。」(Cannegieter, 1964, p. 384.)

このほか、オード川計画では移民の雇用機会の増加も期待されている。(Cannegieter, 1964, p. 384)。

2. 問題点

人口希薄地域と言う条件と、入植・人口増加の目的の達成との間には、以下のようないくつかの問題点が横たわっている。

(1)いかに経済的視点を超越して北部開発を推進するとしても、その裏付けとして、相当程度の経済活動の成立が必要である。人口希薄条件のもとでは、集約的農業よりも、粗放的土地利用としての牧畜(牧牛)と、資源賦存・大資本に依存した鉱業との方が適しており有望である。これは多くの論者の認めるところである。(Davidson, 1972, pp. 72, 272 & 287; Barlow & Newton, 1971, p. 186; Courtenay, 1970, p. 119; McIlraith, 1975)。

(2)従来の北部開発では、牧畜・鉱業よりも、もっぱら農業を優先してきた。

「熱帯オーストラリアの入植・開発においては、牧畜・鉱業が重要な役割を果たしている。しかし、土地を耕し農民が稠密に入植して初めてその開発が実現されると、直接間接に信じられてきた。」(Courtenay, 1975a, p. 48.)

「北部を経済的に開発すべきであると言うとき、通常は農業を意味している。」(Aschmann, 1976.)

(3)鉱業開発による工業化・都市化の進展への期待がある(Driver, 1967, p. 2; Wilkes, 1956, pp. 43 & 45)。しかし鉱業も牧畜も、人口増加への効果はあまり期待できない。これは北部開発の推進論者・反対論者共に多くが認めるところである(Wilkes, 1956, pp. 43 & 74; University of New South Wales, 1962, p. 82; Davidson, 1965, p. 82, & 1972, p. 287; Webb, 1969, p. 2; White, 1969, pp. 4, 18 & 28; Gorham, 1973, p. 4)。

(4)たとえ集約農業などの第一次産業が成立しても、さらに工業化・都市化を含む地域社会の形成が、入植・人口増加に必要である(Courtenay, 1970, pp. 118 & 121; White, 1969, p. 54; Horne, 1964, p. 137)。これは、オーストラリア人の意識・生活様式が著しく都市的であるとの認識にも関係する。

「オーストラリアが農業中心の国家とみなされ、移民が、農民としての入植を希望した時代は、このような政策〔オード川計画〕も、社会的見地から正当化することができた。〔中略〕オーストラリアの経済的特質は、少数の従業員で運営する巨大な農場を控えた都市社会としての発達にむいているのであって、この特質を妨げることなく発展させることが、絶対に必要である。」(Horne, 1970, 訳書 p. 40.)

「現代オーストラリア人のほとんどは、さまざまな海岸部の都市において自己表現の場を見出す方を希望している。さらにオーストラリアの開拓の伝統は、〔家族農場でなく〕牧羊労働者を雇用する大牧場主によって代表されていた。」(Musgrave & Lewis, 1965a, p. 263.)

(5)都市化を含む拡大・発展のためには、域内の人口・市場の拡大が必要であると言う「鶏と卵の問題」(Gorham, 1973, p. 7)がある。

(6)従来の北部開発では、域内自給のための食料生産は十分検討されていない。たとえ自給に努めるとしても、たとえば青果物の自給率の見込みは25%に留まると推定される(Hackett & Tinney, 1974, p. 1; Hackett, 1975, p. 13)。

(7)現実の入植者には、強固な定住の意志に欠ける傾向がある。たとえば、オード川計画の現実「開拓精神」からほど遠い。住宅を含むすべての施設は政府が用意したし、食料自給の努力に欠け高い輸送費の掛かった移入食料に依存している。開拓の困苦に耐えて定住する意志に乏しく、短期的出稼ぎ型が多い(Musgrave & Lewis, 1965b, p. 635; White, 1969, p. 49; Chapman, 1975)。

(8)オード川計画支持者による楽観的推定によってさえ、2060年の予想人口は1万人に過ぎない(Cannegieter, 1964, p. 383)。しかも現実には計画をはるかに下回っている(OECD, 1973, 訳書 p. 270)。特に、深刻な虫害のため、1975年には主作物の綿花の栽培を断念した。このため、一時は灌漑面積約6000ヘクタール、入植農場31戸であったのが、1976年にはそれぞれ約2500ヘクタール、16戸に減少した(*Canberra Times*, 19 February 1975; Western Australia, 1975; *The Australian*, 19 April 1976)。

(9)「オーストラリアの熱帯および乾燥地域の人口増加の可能性は、海岸地帯を除き、限定されている。」(Institute of Australian Geographers, 1974, p. 131.)

V. 周辺地域としての北部

人口希薄地域を絶対的な未開発地域とすれば、周辺地域は、核心地域(南部)に対する相対的な後進・未開発地域として把握できる。

「北部は熱帯であると同時に周辺地域であり、それぞれ自然的、経済的環境を表している。これらが重なり合って、北部の問題を形成している。〔中略〕北部の経済的社会的諸問題の多くは、核心地域から遠く離れていることに由来する。」(Courtenay, 1975b, pp. 95-96.)

1. 周辺地域積極開発論

周辺地域としての認識からは、周辺地域が経済的に不利であるからこそ、開発努力が必要であるとの主張が生まれる。また、周辺地域は長期的には決して不利でなく、経済的に有利な面さえあるとの主張もある。

(1)これまでの開発努力は南部に集中しており、北部は無視・放置されてきた。経済的考慮、すなわち最少費用基準にのみ従っていると、核心地域への集中が進むので、周辺地域は不利である。オーストラリア全体としての均衡の取れた開発を目指して、地域格差を是正するための国家的開発努力が必要である(Wilkes, 1956, p. 105; Bowen, 1965a, p. 267; Kerr, 1967, p. 174; Muir, 1971, p. 4)。

「地域開発は、全国的に富、人口、雇用および社会サービスの、より均等な分布を確保することが目的である。したがって非経済的性格を伴う。〔中略〕短期的効率基準に従えば、公共投資に最も適しているのは、国内で最も開発の進んだ地域であろう。このような一面的な基準では、国内の後進地域の資源をより良く活用することができず、先進地域との格差を拡大してしまう。地域格差の縮小は、オーストラリア全体にとって最大の関心事であり、これによって全体的な発展を促進できる。」(Court, 1965, pp. 4-5.)

(2)経済性比較すなわち最少費用論は、短期的であり、長期的評価には役立たない。北部開発では、試行錯誤を含む長期的効果を考慮すべきである。長期的には、収量の増大や生産費の低下などによって、経済的にも成立するようになる(Kerr, 1967, pp. 172 & 174, & 1975a; Webb, 1975; Munro, 1974, p. 157)。

「Davidsonの経済分析は、余りに直接的かつ短期的な経済効果に集中し過ぎており、そのほかの点についての考慮を無視している。彼は、相対的に新しく成立したオード川計画と、既に確立したニューサウスウェールズ州やクィーンズランド州の綿作地帯とを比較している。このアプローチは、大都市・大港湾から遠い地域に立地した産業のほとんどが初期に抱える問題を無視している。すなわち、投入・産出両面で輸送費が極度に高く、その地域が発展してある程度の人口集中を達成するまで、その状態が続くと言う問題である。」(Kerr, 1975b, p. 34.)

「オード川計画の完成と、その結果としての規模の経済(特に綿花の種取り費用の低下)および生産効率上昇によって、状況は変化する。さらに、灌漑地域の拡大によって、域内加工用および輸移出用の農産物の多様化が期待される。したがってオード川流域が最終的には経済的に採算が取れる地域になると楽観している。」(Pigram, 1970, p. 30.)

(3)既開発地域と比べ、未開発地域の方が収量増大の機会がある。新規開発の方が生産性が高く収入が多い。(Kerr, 1967, p. 174; Cannegieter, 1964, p.387.)

(4)オード川計画の費用は、その効果と比べても、また絶対的にも、実際にはわずかな額である(Court, 1965, pp. 3 & 10; Bowen, 1965a, P. 269)。たとえば、オード川計画の費用は、高速道路のインターチェンジ建設費より少ない(Webb, 1969, p. 13)。

2. 批判

批判の骨子は、周辺地域としての北部が、南部の既開発地域と比べて経済的に不利である以上、北部開発は経済的に正当化できない、と言う点にある。これは同時に、熱帯および人口希薄地域としての北部開発論に対する反論でもある。

(1)北部は、決してこれまで無視されてきたのではない。むしろ多大の努力にもかかわらず、成功しないままに今日に至っている(Horne, 1964, p. 136; Davidson, 1965, p. 66; White, 1969, p. 16; Aschmann, 1976)。

(2)輸送費負担のため生産費が高い。

「生活費が高いため賃金が高い。また必要資材を南部から輸送しなければならない。したがって農業生産費は高くなる。」(Davidson, 1965, p. 28.)

「東南部の人口稠密地帯の市場への供給において、輸送費の点だけでも北部が経済的に不利であることは明白である。この不利の克服には、十分に低い生産費、あるいは規模の経済が必要であるが、これらは共に非現実的である。」(Courtenay, 1975a, p. 52.)

(3)熱帯での農産物のほとんどは、既に国内市場において供給過剰になっている。したがって、国内供給の増加は、価格の低下あるいは補助金の増加を招くだけである。北部での生産は、南部より生産費が低くない限り、補助金増大無しには不可能である(Davidson, 1965, p. 20)。「北部におけるいかなる形の集約農業も、巨額の補助金を必要とする。」(Davidson, 1972, p. xiv.)

クイーンズランド州の砂糖産業や(Davidson, 1965, p. 72)、オード川計画においても同様である(Davidson, 1972, pp.160 & 277; University of New England, 1973, p. 116; Chapman, 1975)。

「オード川流域での7年間にわたる農業の実績は、この地域での農業を補助するよりも、何もせずに人々に生活費を支給する方がずっと安いであろう、ということを示したに過ぎない。」(Davidson, 1972, p. 279.)

(4)北部で生産する作物は南部でも生産できる。もし輸入代替のためにこれらの農産物の生産が必要なら、生産費最少の地域で生産すべきである(Davidson, 1965, p. 9)。

(5)補助金が必要な場合はもちろんのこと、たとえ補助金無しに成立する場合でも、最も有利な地域を選ぶべきである。一般に南部の方が有利である(Davidson, 1972, pp. xii & xvi; Musgrave & Lewis, 1965a, p. 262, & 1965b, p. 634)。たとえば綿花の生産は、ニューサウスウェールズ州ナモイ川流域で急速に発展した(Davidson, 1972, p. 277)。

(7)将来、北部での高生産費が「地域の発展に伴い解消すると考えるのは誤りである。多くの投入財、特に機械や農薬は、大規模工業でのみ生産し得るが、このような工業が北部に成立するとは考えられない。〔中略〕南部からの輸送費による追加費用は、依然として存在し続ける。」(Davidson, 1965, p. 28.)

VI. 結 論

北部開発論に対する批判は、主として、オーストラリア国民経済全体の利益のための経済的立場に基く。この立場に立つ限り、批判の側に説得力がある。したがって、北部開発論が説得力を持つためには、(1)オーストラリア全体ではなく、「北部」の利益、(2)非経済的目的、を前面に出す必要がある。いずれの場合も、主体的に目的を設定し追求する地域として、ますます明確に「北部」を設定しなければならない。

しかし、「北部」を設定する基盤は貧弱である。「熱帯」および「対アジア関係」は、地域の形式的指標として有力であるが、政策の上での説得力に乏しい。特に、それらの主張が、オーストラリア全体の利益と言う視点に立脚しているので、同じ視点からの批判の前に無力である。これに対して、「人口希薄」および「周辺性」は、国内の特定地域を開発する非経済的根拠として、一定の意味を残している。しかし、「人口希薄」は、北部を特定する根拠としては薄弱である(図1)。また「周辺性」も、南部と北部との対比よりも、州内での核心部と周辺部との関係や、連邦レベルにおける中心州と周辺州との関係において把握する方が、現実的に意味を持っている(谷内, 1976a & 1976b)。したがって、これらの指標によって北部を設定する必要性は無い。

以上の考察から、いわゆる北部開発論において、目的と、そのための計画地域としての北部の設定との間には、意味のある対応関係が見出せないと結論できる。したがって、「北部」あるいは「熱帯」と言う地域に対応した開発論を再構成するか、あるいは開発目的に即して計画地域を設定し直すかを選択することによって、開発目的と計画地域との対応関係を回復できるであろう。

文 献

- Aschmann, H. (1976): Northern development 'a history of failure'. *ANU Reporter*, 11 June 1976.
- Australia(1959): *Western Australia Grant(Northern Development)Act 1958-1959*.
- Australia(1963): *Western Australia(Northern Development)Agreement Act 1963*.
- Australia(1973): *Regions*.
- Australia(1975): *Australian government directory*.
- The Australian*, 19 April 1976.
- Barlow, M. H. & Newton, R. G. (1971): *Patterns and processes in man's economic environment*. Angus & Robertson, Sydney.
- Bolton, G. C. (1970): *A thousand miles away: a history of North Queensland to 1920*. Australian National University Press, Canberra.
- Bowen, I. (1964): Comment. *Economic Record*, 40, 392-394.
- Bowen, I. (1965a): A comment on the Ord controversy. *Economic Record*, 41, 267-269.
- Bowen, I. (1965b): A comment *Economic Record*, 41, 637-638.
- Campbell, K. O. (1964): Secondary benefits. *Economic Record*, 40, 597.
- Campbell, K. O. (1965): Secondary benefits - a further comment. *Economic Record*, 41, 456.
- Canberra Times*, 19 February 1975.
- Cannegieter, C. A. (1964): Some socio-economic aspects of the Ord River Scheme. *Economic Record*, 40, 375-391.
- Cannegieter, C. A. (1965a): Secondary benefits: a reply. *Economic Record*, 41, 124.
- Cannegieter, C. A. (1965b): A reply to a further comment. *Economic Record*, 41, 456.

- Chapman, A. (1975): Personal interview, 2 October 1975, Kimberley Research Station, Kununurra, Western Australia.
- Copland, D. (1967): The Australian economy; new horizons - tasks ahead. Paper at the Fourth National Conference of the National Council for Balanced Development.
- Court, C. W. M. (1965): Development of Northern Australia with special reference to the current programmes in the Northwest and Kimberley region of Western Australia. Paper at the Economic Society of Australia and New Zealand(Victorian Branch).
- Courtenay, P. P. (1970): Development problems of tropical Australia. *Geografisch Tijdschrift*, IV, 117-122.
- Courtenay, P. P. (1975a): Tropical Australia. (Unpublished draft, personal correspondence.)
- Courtenay, P. P. (1975b): The problems and prospects of Northern Development. *Geography Bulletin*, 7, 94-102.
- Davidson, B. R. (1965): *The northern myth*. Melbourne University Press, Melbourne.
- Davidson, B. R. (1972): *The northern myth* (Third edition). Melbourne University Press, Melbourne.
- Driver, A. R. (1967): New dimensions and new horizons. Paper at the Fourth National Conference of the National Council for Balanced Development.
- Gorham, E. R. (1973): *Developing the North West*. Department of Development and Decentralization, Western Australia, Perth.
- Hackett, C. & Tinney, J. (1974): Fruit and vegetable supplies for the remote communities of Australia to year 2000. (Unpublished draft for Search.)
- Hackett, C. (1975): Fruit and vegetable supplies for remote communities: production review. L. C. Brodie-Hall ed., *A report on fresh fruit and vegetable research in Northern Australia*, Western Australia State Committee, CSIRO, Perth, 13-16.
- Harris, C. P. (1975): *The classification of Australian local authorities*. Australian National University Press, Canberra.
- Horne, D. (1964): *The lucky country; Australia in the sixties*. Penguin Books, Melbourne.
- Horne, D. (1970): *The next Australia*. (竹下美保子訳『オーストラリアの解剖』, サイマル出版会, 1972.)
- Institute of Australian Geographers (1974): The distribution of Australia's population: a submission to the National Population Inquiry by the Institute of Australian Geographers. *Australian Geographical Studies*, 12, 126-132.
- Kerr, A. (1967): *Australia's North-west*. University of Western Australia Press, Perth.
- Kerr, A. (1975a): Personal interview. 23 September 1975, Murdoch University, Perth.
- Kerr, A. (1975b): Unpublished draft for the revised edition of *Australia's North-west*. (Personal correspondence.)
- Laing, N. F. (1964): Measuring the "benefits" to additional immigrants - a comment on Dr. Cannegieter. *Economic Record*, 40, 395-397.
- Learmonth, N. & Learmonth, A. (1971): *Regional landscapes of Australia*. Angus & Robertson, Sydney.
- McIlraith, J. (1975): Intensive capital needed to run north's industries well. *Australian Financial Review*, 3 October 1975.
- Muir, D. (1971): North Queensland's development prospects. Australian Institute of Management(Townsville Branch), *North Queensland in the 70's*(Senior Management Conference).
- Munro, C. H. (1974), *Australian water resources and their development*. Angus & Robertson, Sydney.
- Musgrave, W. F. & Lewis, J. N. (1965a): Measuring the value of political arguments - a comment on Cannegieter. *Economic Record*, 41, 262-266.

- Musgrave, W. F. & Lewis, J. N. (1965b): The Ord controversy - a rejoinder. *Economic Record*, 41, 633-636.
- OECD(1973): *Agricultural policy in Australia*. (佐々木敏夫, 築館久枝, 沼田頼雄共訳『OECD 諸国の農業政策』中巻, 大明堂, 1976.)
- Patterson, R. A. (1965): The economic justification of the Ord River Project. Paper at 38th ANZAAS Conference, Hobart.
- Pigram, J. J. J. (1970): *Cotton*(Industry in Australia, 8). Longman, Melbourne.
- Rees, C. & Rees, L. (1953): *Spinifex walkabout*. Sydney.
- Stuart, E. J. (1923): *A land of opportunities*. London.
- 谷内達(1976a): Infrastructure development in Northern Australia. Unpublished paper, Department of Human Geography, Australian National University.
- 谷内達(1976b): オーストラリア経済の地域分析のために. オーストラリア研究紀要(追手門学院大学) 2, 104-141.
- University of New England(1973): *The agronomy, farm management and economics of growing and utilizing multiple cropped grain sorgham in the Ord River Valley, Western Australia*. Armidale.
- University of New South Wales(1962): *Development of Northern Australia*(Symposium). Sydney.
- Webb, M. J. (1969): The impact of capital intensive industries on arid Australia. R. O. Slatyer & R. A. Perry eds., *Arid lands of Australia*, Australian National University Press, Canberra, Chapter 11.
- Webb, M. J. (1975): Personal interview, 23 September 1975, University of Western Australia, Perth.
- Western Australia(1968): *Ord irrigation project*. Public Works Department, Perth.
- Western Australia(1975): Personal interview, 2 October 1975, Department of Agriculture, Kununurra.
- White, O. (1969): *Under the iron rainbow: Northwest Australia today*. Heinemann, Melbourne.
- Wilkes, J. ed. (1956): *Northern Australia: Task for a nation*. Australian Institute of Political Science, Sydney.

Development Objectives and Regional Identity: A Review on the "Northern Development" Controversy in Australia

Toru TANIUCHI

The case for "Northern Development" is a policy proposal which urges to develop northern Australia with considerable national efforts, and aims at developing and populating "the North", typically through the establishment of the intensive tropical agriculture and hence closer settlement.

Northern Australia in the context of Northern Development is defined as the area north of the Tropical Capricorn. This is not a conventional region, e.g. a political boundary, but a planning region, being specifically identified in view of the objectives of Northern Development.

Any regional development policy should be expected to keep a reasonable consistency between its objectives and regional identity, particularly in the case of a planning region.

This paper has examined the development objectives in relation to the regional identity, in terms of the four aspects of the North: i.e. "tropical", "Asia", "sparsely populated" and "periphery", by reviewing the Northern Development controversy.

The main criticism against Northern Development is based upon economic criteria from the national viewpoint, which seems to have destroyed the most of the economic arguments of the proponents. The case for Northern Development, then, has to be based upon the non-economic and regional points of view, making it more necessary to ensure to establish the regional identity of the North.

It seems to be difficult, however, to establish the regional identity of the North in relation to the Northern Development objectives. Among the four aspects of the North, the first two, i.e. "tropical" and "Asia", can be assumed to be the direct criteria to identify the North. However, the policy proposals derived from these aspects have been unfavourably criticised to be far from realistic. On the other hand, the other two, i.e. "sparsely populated" and "periphery", do not necessarily result in identifying the North as a planning region for the policy objectives derived from these two, although these objectives have some grounds.

This paper concludes that little relationship could be found between Northern Development objectives and the regional identity of the North. It would be needed either to reconstruct the policy objectives to be consistent with the North, or to establish other kind of regional identity in view of the objectives.